

『近代仏教教団とご詠歌』

真鍋 昌弘

での「芸能伝承のあり方を知る上においても、興味ある音楽の一つ」として、「正調ご詠歌」なるものを創出させるまでに到る段々の経緯が、統計・図表・楽譜などを丁寧に着意して、順を追って論述がなされている研究であることがわかる。

日本における近代現代歌謡研究分野の一つとして、ご詠歌（順礼歌）の伝承（歌詞・旋律・場と機能・信仰・環境・生活・比較・出版など）の実体に関わる基盤的研究がある。仏教信仰のその心にささえられて、人々が、本来は宗教活動・宗教教義とは一定の間隔・層を置いて、うたわれ唱えられてきた、民間民衆仏教歌謡の研究である。ご詠歌研究は、まず歴史的な幅をもつて、日本民衆文化の特質や普遍性を理解するためにも、つまり日本文化史上、興味ある課題をそこに発展的に捉える意味でも、常に意識しておくべきジャンルの一つである。しかし最近、新しい発想で、しか

も調査に忍耐強く徹した、興味ある研究成果は少ないのではないかと、この書評筆者には思われる。歌謡研究においては、もつとも基本となるべき歌詞の蒐集分類・解釈においても、その数の多さに圧倒されることにおいても、日本列島を視野に入れた成果は、まだほとんど進んでいないのではないかと思う。

そうした状況のなか、このたび、新堀歎乃著『近代仏教教団とご詠歌』が出版された。論述中なか、この著書は、著者の専攻する音楽学の立場での、宗教音楽としてのご詠歌研究であると述べられていたのであるが、読み進めてゆくと、その調査考察されている視野・課題は、かなり広く設定されていて、教団によるご詠歌伝承の「近代化」に沿って、近代

この書評筆者にとつては、宗教上または音楽上、その意味を理解する上で難しいところも多々あるが、一応、章を追って、本文を引きながら内容を紹介解説してきた。なお本書は章の終りと、全体の終りに、論理明解なる「まとめ」を置いて論

旨を伝えている。

序章〈宗教音楽として見るご詠歌〉では、「本書は、一九二〇年代に民間で伝えられていた大和流から、仏教教団の伝えるご詠歌の諸流儀が分派成立した経緯に着目し、ご詠歌という宗教音楽が教団による布教活動の一環として伝承されてきた過程と、その過程における伝承形態の変容を解明することを目的とする」と述べ、「近代に成立したご詠歌諸流儀のうち、大和流・金剛流・密厳流の三流を取り上げる。その理由は、大和流がその後成立する諸流の基礎を形成した流儀として重要であり、この大和流から分派した金剛流と密厳流は教団による伝承の始まりを担った諸流の中でも特に教団の統制が堅固であり、布教用音楽としての性格が明確に把握できる」と、本書の目的を示している。一九二〇年代以前は、ご詠歌は教団における布教の役割を、組織的に負わされているものではなかったのである。

二

第一章〈ご詠歌諸流儀の成立過程〉では、「第一節、大和流の成立」「第二節、金剛流の成立」「第三節、密厳流の成立」の三節から成り、それぞれ「レバトリ―の整理および歌集の作成」「階級制度の設置」「奉詠大会の開催」などいくつかの項目について、流派の共通面・相違面を指摘して、それぞれの特徴を論じている。階級制度では、「ご詠歌の伝承者を格付けする階級制度を置いて、名取制度を導入し、それによって伝承者を急増させたという流れは、大和流と同様の階級制度を備えた金剛流・密厳流にも見て取ることができ、ご詠歌の諸流儀に共通する特徴であると言える」としている。ご詠歌の伝承としては、階級・名取りなどという格付けを現実に行なうことは、むしろ意外な近代化であると思われるが、これが流派の中の秩序であることを報告している。つまり書評筆者から言うところ

「型」をもつ、一つの芸能分野になった、とも言えよう。この伝承文化の「型」については、ご詠歌の表現類型とともに、今後まだ研究しなければならない興味ある課題が多いと思われる。

第二章は「金剛流・密厳流のご詠歌が、講の組織を地盤に、布教音楽としてその重要性を高めてゆくことを述べ、続いて、浄土真宗が西洋音楽の影響を受けて布教活動を開始していたのに対抗して、真言宗では、近代以前からの既存ご詠歌を再編して近代化を図るものであったと述べ、その詳細は第三章に移している。

第三章〈仏教教団によるご詠歌の再編―「俗謡」から「仏教音楽」へ〉、第四章〔「正調」を伝える楽譜と口頭伝承〕においては、教団の中に取り込まれたご詠歌が、布教という最重要目的に向かって、どのように練られ位置づけられ、活用されるかを緻密に辿っている。次にそのまよめの一部を引く。もちろん本書にとつて、この第三章、第四章が中核である。「仏教教団は、それまで「乞食歌・

俗謡」とみなされていたご詠歌を、正統的な「仏教音楽」へと位置づけるべく、その伝承組織（階級制度）と音楽的特徴（楽譜・音楽理論）を再編した。その結果、正統的な流儀を意味する「正調」という概念が生じた。つまりご詠歌の伝承者は階級制度や楽譜・音楽理論といったご詠歌の流儀を特徴付ける諸要素のなかに伝統を見出し、それらを再編することによって、正統的な流儀すなわち「正調」を確立したのである。正調に関しては、これまで主に民謡研究がその概念成立を論じてきた。先行研究によれば「正調」とは、民謡が伝統文化となっていく過程で創出されたもので、たとえば卑俗な歌詞を改めるなどして、西洋のスタンダードに合わせた民謡が「正調」と呼ばれるようになった。ご詠歌の場合も、伝承者は歌詞や節の改変を通して、新しいご詠歌を創り出そうとしたのである」と述べ、続いて第四章では、「ご詠歌は、一九二〇〜三〇年代に、現在に伝わる諸流儀が成立し、そのなかでも楽譜の成立は、ご詠歌

の伝承にとつてとりわけ大きな変革のひとつであった。（中略）一見するとご詠歌は、「文字の文化」に組み込まれた。しかしその伝承の変遷を丹念に追っていくと、ご詠歌の伝承者は楽譜を用いながらも、ときに楽譜を否定して、伝承者自身の「声」に信頼を寄せる様子が浮かび上ってきた」としている。ここに著者が言う「声」に信頼を寄せる伝承の実体は、やはり、「正調」という「型」の理想でのみ括ってしまえない、ご詠歌がもっている口承文芸・伝承音楽としての素性・性格がそこに認められるということであろう。これは学術上おもしろいことである。

三三

近代現代における「ご詠歌」は、宗教的実践によって生成展開してきた実体であり、音楽的実践によって生成展開してきた実体であり、そして文芸的実践によって生成展開してきた実体でもある。ご詠歌の歴史のどの時点においても、この宗

教・文芸・音楽の要素は融合していて、いづれかが欠けている状態はまったくないのであり、特に近代現代においては、この伝承が実際にリアルなものとして認識できる場合も多い。書評筆者から言うところ、これがご詠歌の立体的把握であり、その把握が常に必要である。「近代仏教教団とご詠歌」においては、第四章・第二節「楽譜と口頭伝承が変容するしくみ―「追弔和讃」を対照に―」における考察叙述が、まさにそれにあたる。この部分は本書における大切な成果の一つであろう。音楽（楽譜）の変遷・伝承の詳細な考証をすすめながら、追弔和讃の文芸が、「人のこの世は永くして」から「五色の雲にいるぞとうとき」まで、つまり一つのテーマのもと、きちんとそこに示されているのである。これは、優れた論考である。ただし本書全体を通して見ると、残念ながら音楽とともにあった文芸（歌詞）の提示が少ない。「ご詠歌が信仰表現のためうたわれる宗教音楽または仏教音楽である」といっても、歌詞・ことばなどの

文芸性の無い状態はほぼ無いのであろうから、やはりある程度の区切りをもって、音楽とともに歌詞もその提示がある方がよい。

このことにもかかわるが、曾我部俊雄や岩村義運などの、ご詠歌に対する、「頽廢的」「乞食歌」「俗謡」などの表現、あるいはそれに近い雰囲気の評語においても、その歌詞がまったく関わっていない状態の、旋律だけを取り上げた評語ではないように思われるがいかがであろうか。おそらく曾我部も岩村も、具体的なご詠歌を一つ二つ引用し、明示して言っているわけでもなさそうで、難しいところではあるが、そのように言ったのは、音楽面のみで判断しているわけではなからうと推量するであろう。全体として負のイメージで言っているのであろう。また、第三章、『密厳流詠讚要決』の解説を引用している部分で、「観音霊場和讃節」を取り上げているところでも、その解説で「どうも歌詞が卑俗で、その上前後矛盾した所がある」と指摘するところの歌

詞が、注60に「変更前」と「変更後」として具体的に示されていて参考になるが、これもよくわからないのである。変更後が変更前より、良くなっていると一概には言えないのである。

四

本書をもとに著者がさらに探究されることを期待したい。教団による布教のためのご詠歌は、いつどのような場でうたわれているのか、どのように受け入れられているのか、それは江戸期からのご詠歌（順礼歌）の伝承の場とくらべると、どのように変化していったのか、また第四章の「ま

とめ」にある、文芸・宗教からして課題となる「ありがたさ」（あるいは書評筆者からすると「たのもしさ」他も加えて）など、ご詠歌を軸とする、詳細日本列島文化論がさらに展開されることを期待する。感想としては、本書の中で提示されている音楽・楽譜部分が、実際の音でもって（たとえばCDが添えられていて）聴くことがで

きなかったのは、や、心残りである。

ともかく、本書は、仏教教団におけるご詠歌の音楽文化研究として、徹底した真剣な研究成果を示したと言える。布教音楽としてのご詠歌の実体が、本書によって、はじめて明確に示されたと言える。口承文芸研究の立場から見ても、この著書の出版の意義は大きい。続いて、ご詠歌の音楽性・文芸性・宗教性の多様な融合一体の課題において、広い視野に立った著者独自の成果に期待したい。

二〇一三年五月 勉誠社刊

六〇〇〇円＋税

（まなべ・まさひろ／奈良教育大学・関西外国語大学、各名誉教授）